



Title	家を繕う：青島工芸による京都・西陣の職住一体型町家改修の事例から
Author(s)	はしもと，さゆり
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 134-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

家を繕う

— 青島工芸による京都・西陣の職住一体型町家改修の事例から

はしもとさゆり 奈良女子大学大学院在学

はじめに

青島工芸は、発表者と大工、青島雄大の二人を中心としたものづくりのユニット（工務店）で、京都、西陣を拠点に活動している。

京都における町家保存の状況は極めて厳しく、京都市によると、年間 700 軒、1 日に 2 軒のペースでその数が減少しているとされる。市は「現代のライフスタイルに合わせた改修方法が伝わっていない」「改修できる技術者、事業者が減少している」ことなどをその要因として分析している。

本件で扱った賃貸町家は、所有者であるご近所の A さんが、「どこの誰かわからない人に住んでほしくない」との理由で家の前に掲げた看板でのみ借手を募集しており、同じくご近所で八百屋兼飲食店 yatono を営みながら移転先を探していた O さんを紹介したことから計画がスタートした。



図 1 改修前。大正頃の建物に昭和の内装という西陣で見られる典型的な使われ方の町家。薄暗い。

町家の保存・継承

本事例の目的は三つ。一つ目は、端的に町家の保存と継承であり、適切な手入れをして再び向こう数十年と安心して暮らせる状態にすることであった。一例には、内風呂普及の時代以降、庭を塞ぐようにいびつに配置された水回りの解体と新

設が挙げられる。光、空気、水の通りの再考、構造補強、断熱などを行い、建物を健全な状態に直すことを試みた。毎日のように現場に来ていた O さんはその様子を「健診と治療みたい」と評した。



図 2 傾いた柱の調整（左）渡り廊下を作り、水回り棟を新設。中庭を設えることで採光を確保した（右）

ものづくりを開く

二つ目は、ものづくりを開くこと。その方法として「ワークショップの開催」と「DIY サポート」を行った。「ワークショップの開催」は、初心者でも取り組みやすい解体と土間打ちの 2 つの工程において参加者を募り実施し、計 4 日間で 20 名超の参加があった。改修や家づくりに関心のある人、馴染みの店の移転を手伝おうという人が集い、共同作業の時間がもたれた。休憩時間には個別の改修相談や地域の場づくりについての話題が上がり、若い参加者からは進路についての相談もあった。建築生産を専門にする権藤智之は工務店の役割を「材料や職人が集まる場があることは、修繕を頼みやすく、その地域の建物を直して長く使うことにつながり、コミュニティを良好に維持することにも役立ってきた」と指摘するが、本ワークショップにおいても、つくること直すことを中心とした、弱い紐帯が生まれたように思う。



図3 ワークショップの様子と参加者からの感想

「コンクリートを混ぜるのがあんなに力が必要だとは、想像以上でした」「『お家さん、良かったね』って気持ちでいっぱいになりました」「手作業で作り上げる、出来上がっていくのを見ながら作業するのって楽しい好きだなと再確認できました」「体系的に知ることができました。もう少し慣れたら自分でも打てるかもと感じられるのも良かったです」

「DIYサポート」は、庭づくりや土壁の補修、壁の仕上げ（珪藻土の左官、タイル貼り）などの工程において実施。資材の選択や購入を指導しつつも、任せられそうなところは極力任せることを試みた。これは施主（住まい手）にとって技術の獲得にも、予算の削減にも繋がる。また、家を様々な角度から眺めること、手を加えることのもたらす作用についても着目している。



図4 家中の壁の漆喰塗り，住まい手自身が実施した。

地域に必要な場作り

第三の目的は、地域やそこに暮らす人にとって必要な場所を作ること。これは地価の高騰やオーバーツーリズムの問題が随所で顕在化する京都では特に重視した点であった。

建築家の山本理顕が指摘するように、住むためのだけの住居は近代の発明品であり、それ以前は住居内の公的領域と私的領域の中間領域（町家ではミセノマ）がコミュニティ形成を促してきた。

本件では、元来の職住一体の機能を復元し、まちの人が立ち寄り、集う町家を再構築した。一階

に設えたのは、店舗と台所、居住用のダイニング（町家の呼称では、ミセノマとトオリニワ、ダイドコ）である。Oさんは「中か外かわからない店にしたい」と言い、店舗の土間は真砂土で仕上げることにした。前面には腰掛けられる大きな出窓を設え、シンボルツリーのバナナの木も植えられた。大家のAさんは「沖縄ができた」と喜んだ。



図5 完成後の様子

おわりに

視野を全国に広げても、空き家の増加や大工不足、住宅政策における単身世帯の取りこぼしなど家を取り巻く問題は山積みである。一体どこから手をつけ、直していくことができるのだろうか。

私たちはそれをつくることの再考から試みる。本事例では、大工を中心とした人々の手で古家を修繕し、単身であっても安心して働き暮らせる広さと設備の伴う住居を整えることができた。

近代以降、多くの現場から失われた、つくり手自身がデザインすること、つくりながら考えること、使い手との対話や協働を繰り返しながらそれを行うことを取り戻そうとしている。私たちはそれを靴下の穴を繕うような感覚の家づくりとも呼ぶ¹。綻びに応答するように目を凝らし、手を動かすこと。そのようにしてモノや家、まちに愛着を持って暮らす人が増えることも期待している。

註

- 1 はしもときゆり，青島雄大「東京から京都・西陣へ移住して子育て。賃貸町家を改修費200万円で住み継ぐ」京都市空き家対策室 空き家居住学，2024年 <https://akiya.city.kyoto.lg.jp/dighome/kyojugaku03/>